

電気を消して、スローな夜を。 キャンドルナイトin筑波大学!! ～途上国の暮らしにふれてみよう! (11023A)～

渡辺 健太 (生物資源学類 4年)



きっかけ

私は生物資源学類に所属し、途上国の開発経済学を専攻しています。また、一人旅が趣味で、今までに多くの途上国を放浪してきました。そこで、日本にはない貧困の風景をいくつも見たのです。帰国後自分でも何かできることはないか必死に考えました。しかし、私自身は途上国を放浪してきた実体験があるので、共感や危機感を抱くことは容易ですが、多くの日本人は恵まれた日常生活の中で途上国の貧困を案ずることなど難しいでしょう。とはいえ、グローバル化が進む現代社会においては、私たち先進国の人間も途上国の貧困とはもはや無関係ではありません。

そして、今回の東日本大震災、さらに福島第一原発事故です。私は日本人のこれまでの生活様式が見直されるべき時が来ていると感じました。だからこそ、このような背景で、大幅な節電目標が課される筑波大学において、単に節電に協力するだけでなく、むしろこれをきっかけとして、アナログな文化から何かを感じ取ってくれれば…というような思いから、今回この「キャンドルナイトin筑波大学」を企画しました。



素敵な演奏と共に…

キャンドルナイトを終えて

イベント自体は、多くの人に足を運んでいただき、翌日の常陽新聞の一面に取り上げられるなど、大きな反響を呼べたのではないかと思います。「またやってね」とか「家でもキャンドルナイトをしてみるね」なんて来場者に言われた時は嬉しくて気絶しかけました。しかし、全てのコンテンツを自分たちでゼロからプロデュースするのは予想以上に大変な作業でした。キャンドルの手配、音楽団体への交渉、会場整備、広報活動…。慣れない経験の連続でした。それを何とか形にできたのは一緒に運営に携わってくれたメンバーの精力的な働きがあったからこそです。感謝。

T-ACTはまだ企画の概要も定まりきっていない段階の「こんなことがしてみたい!」という漠然かつ稚拙な私の提案も真剣に聞いてくれました。とに

かく何か行動を起こしてみたいという学生にとってT-ACTは非常に心強い味方です。実は当初、学内でキャンドルを使用することに対して大学側が難色を示していましたが、T-ACTの全面的な協力のおかげで、安全対策を万全にするという条件のもと、学内でキャンドルを使用することが出来ました。



廃油から作りました!

身近なところから「ふらっと」国際協力

今回、このキャンドルナイトを運営したのは私が立ち上げた「FRAT」というフェアトレードの推進活動をメインとした国際協力団体です。現在メンバーは10名程。定期的にイベントに参加してフェアトレード商品の販売を行っています。また、「つくちよこ」というつくば発のフェアトレードチョコの商品開発なども手掛けています。買い物という身近な生活ツールを通して世界を少しでも変えることができたら…。そんな思いで日々まったりと活動しています。

国際協力というと「偽善者」だとか「まじめ」とかいう偏った見方をしてしまいがちです。私もそうでした。しかし、それは国際協力活動を自分で実際にしてみなければ分からない事ではないでしょうか。初めは自己満足でも構わないと思います。何もせずに批判するより、とにかく動いてみた人の方が、その後の言葉が何だろうと説得力があるものです。少しでも興味を持った方は「つくば×フェアトレード」で検索してみてください!



イベントでの販売風景